

# かかわる力を育む幼小一貫の道徳教育カリキュラム開発のための基礎研究

宮里 智恵 井上 弥 鈴木由美子 石原 直久  
岡野 佳子

## 1. 問題の所在と本研究の目的

近年、青年期におけるいじめやひきこもりなどの反社会的行動や非社会的行動の増加が問題となっており、これらの行動の背景には対人関係能力の未発達があると考えられる。

対人関係能力は人と直接かかわることで育つものであるが、少子化や核家族化、地域社会の崩壊などにより、子どもを取り巻く人的環境は大きく変容した。子どもは限られた人間関係の中で成長せざるを得ない状況にある。近年では、人と深くかかわり合うことを避け、互いに本音を隠したまま表面的なつきあいをしようとする青年層の増加も指摘されている。

いじめやひきこもりなどの反社会的・非社会的行動は青年期に顕在化するが、その問題の原因は児童期に蓄積していることが指摘されており、集団生活を開始する幼児期から児童期にかけて人とかかわる力を継続的に育成することは大変意義あることである。

幼稚園や小学校においては、人との望ましいかかわり方についての道徳教育が日々行われているが、それらは事例対処的であり、対人関係能力の育成に向けた意識的系統的な教育にはなり得ていない。それは、対人関係能力の育成を意図し幼小を貫いた形の道徳教育カリキュラムがないことに原因があると考えられる。

広島大学附属三原学園においては、園児・児童・生徒の異校種異年齢交流活動を行っており、子どもの対人関係能力の育成に成果をあげている。特に小学校4年生と幼稚園年長児のペアでスタートする交流は、その後3年間同じペアで活動する。幼稚園年長から小学2年までは年上とのペア活動を、小学4年から小学6年までは年下とのペア活動を行うこの交流活動は、数年の間に年下と年上の両方の立場を経験できることから対人関係能力の育成に効果があると考えられる。

そこで本研究においては、三原学園の小学4年生と幼稚園年長児とのペア活動を対象に、ペア活動の初年

度における対人関係能力の育成に有効な要因を規定し、人とかかわる力を育む幼小一貫の道徳教育カリキュラムの開発に必要な基礎資料を得ることを目的とする。

## 2. 研究の方法

### (1) 対象

広島大学附属三原学園 幼稚園年長児(ゆり組34名)と小学4年生(4年7学級37名)で構成する34組のペア

### (2) 方法

- ① 平成17年5月～12月までのペア活動における年長児と小学4年生のかかわりの様子をビデオ録画し、その分析を行う。
- ② ペア活動前後に小学4年生に対しアンケート調査を行う。
- ③ ペア活動に関し、担任教諭に聞き取り調査を行う。
- ④ 4年生を含めたいくつかの学年を対象に道徳性検査や社会性調査を行う。
- ⑤ ①～④の資料を基に道徳性の発達という観点からペア活動の有効さを規定する要因を探る。

## 3. かかわる力を育む異校種異学年ペア活動(小学4年生を中心に)

ここでは平成17年5月～12月までのペア活動について小学4年生の様子を中心に追いながら、それぞれの時点での子どもたちの様子をビデオ映像の分析によって捉えるとともに、子どもたちの心情をアンケート調査と担任教諭への聞き取りを通して掴む。

### (1) 児童の属性と活動への事前の思い

ペア活動開始前に、4年生の子どもに数項目のアンケート調査を実施した。結果は次の通りである。

図1はこれまでの生活の中で、「自分より小さい子

もと遊んだ経験」を問うたものである。少子化とは言え、85%もの子どもが小さい子どもと遊んだ経験を持っており、特に「毎日のように遊ぶ」と答えた子どもが過半数に上ったことは注目に値する。

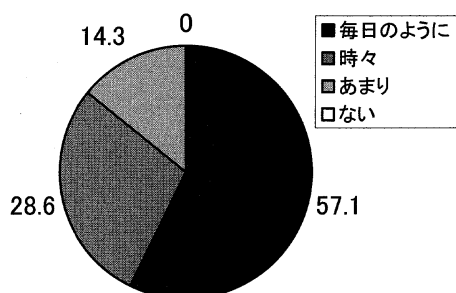


図1 自分より小さい子どもと遊んだ経験

図2は「一緒に遊んでいる小さい子ども」を尋ねたものである。多くの子どもがきょうだいや近所の子どもと遊んでいる。

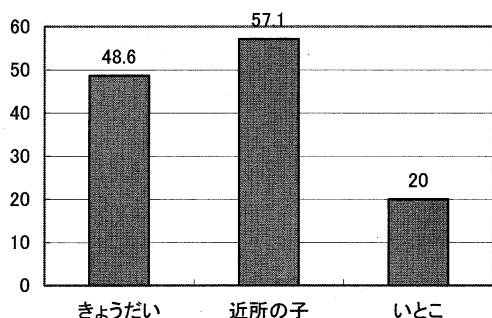


図2 一緒に遊ぶ小さい子は誰？

## (2) 交流活動の流れ

本年度の交流活動は「ペアから学ぶペアとのかかわり」という大単元名のもと、5月から12月までで次の4つの小単元を行った。

### ① 時期：5月

内容：出会いの活動

単元名：幼稚園さんと仲良くなるう

ねらい：ペアの年長児のことをよく知り、これからの交流に対する意欲を高める。

### ② 時期：6月

内容：幼小中合同運動会

単元名：一緒に楽しく踊ってもっと仲良くなるう

ねらい：中学2年生をお手本として、年長児とのかかわり方を学び、幼稚園さんと楽しく

踊り仲良くなる。

### ③ 時期：10月

内容：3回目の交流

単元名：幼稚園さんとチョコバナナをつくろう

ねらい：年長児の思いを大切にしながら、共に楽しく活動することでより信頼関係を深める。

### ④ 時期：12月

内容：4回目の交流

単元名：幼稚園さんと私たちの夢をかなえる「夢のテーマパーク」をコーディネートしよう

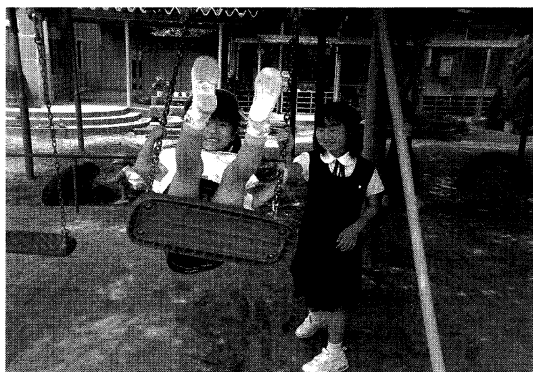
ねらい：年長児の思いと自分たちの思いを調和させながら共に楽しめる交流を創り出すことができるようにする。

## (3) 交流の実際

### ① 出会いの活動（5月）

『幼稚園さんと仲良くなるう』

子どもたちはこの日のために自己紹介カードを作り、小学校と同じ敷地内にある幼稚園に出かけてペアに渡した。また、話をしたり自由に遊んだりしながら初めての交流をした。最初はお互いに緊張していたが、徐々に打ち解け、別れるときは「また一緒に遊ぼうね」「お姉ちゃん、また来てね」など、別れを惜しむ様子も見られた。交流後の振り返りでも、ほとんどの子どもたちが「ペアの幼稚園さんと仲良くなれた」「もっと一緒に遊んだり話をしたりすると、今よりも仲良くなれる」と述べ、これからかかわりを増やし、より仲良くなるうと考えていた。



### ② 運動会（6月）

『一緒に楽しく踊ってもっと仲良くなるう』

本学園では運動会の演技の中に、幼小中のかかわりを持たせた「お兄さんお姉さんといっしょ」がある。対象学年は幼稚園年長児・小学4年生・中学2年生で

ある。4年生の子どもたちは、まず中学2年生から踊りを教えてもらった。自分たちで完璧に踊れるようになってから年長児のペアに教えに行った。運動会当日まではほぼ毎日、年長児との練習を積み重ねた。

この単元の活動前、子どもたちは「幼稚園さんとかかわればかかわるほど仲良くなる」と考えていたが、実際は「幼稚園さんが言うことを聞いてくれない」「私のペアさんはぜんぜんしゃべってくれない。私のことが嫌いなのかな」など、困ったり悩んだりしていた。この運動会での活動を通して、子どもたちは、「同じことをやっても幼稚園さんと私たちでは感じ方が違う」「幼稚園さんは慣れてくると、わがままになることもある」「一緒に活動するだけでは自然と仲良くなるわけではない」ときに気づき、今後の活動を見直すようになった。



### ③『幼稚園さんとチョコバナナをつくらう』(10月)

子どもたちは、今までの交流の反省をもとに第3回交流会のねらいについて話し合いを行い、ねらいを次のように設定した。

- 幼稚園さんと一緒に楽しく活動することで、幼稚園さんともっと仲良くなり、信頼されるようにする。
- グループで活動することで、自分のペアさんだけでなく他の幼稚園さんとも仲良くなる。

活動は「作るのも楽しいし、食べるのも楽しい」からお菓子作りとし、幼稚園さんも簡単に作れそうな「チョコバナナ」とした。

年長児と一緒に作る前に、本番で留意する点などを探るため4年生だけでリハーサルのチョコバナナ作りを行い、「安全に」「おいしく」「一緒に」という三つの視点をもって活動を進めることを確認した。

当日の朝全員がいつもよりも早く登校し、調理室で準備を行った。交流会は係や各班のリーダーを中心に、事前に全体で確認した三つの視点で活動を進めていっ

た。子どもたちは、年長児に笑顔で声をかけたり年長児の手に自分の手を添えたりして、年長児の活動を支援しながら優しく接していた。

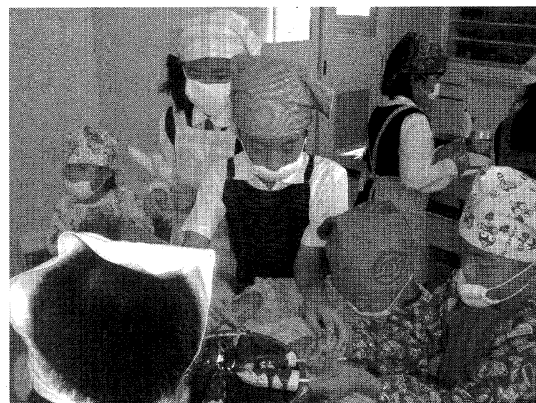
最初は年長児に作業を任せたり一緒に作業を行ったりしていたが、途中から「難しそうだから私がやるね」と4年生だけで作業を進めるようになると、数名の年長児が退屈そうに室内を歩き出すようになった。4年生は「幼稚園さんにけがをさせてはいけない」「幼稚園さんにおいしいチョコバナナを食べてもらいたい」という思いが強く、「一緒に」という視点を考えられなくなっていた。全員が作り終え、後片付けの後、各班に分かれてチョコバナナを食べた。多くの子どもたちが、「おいしいね」「楽しかったね」と笑顔で話をしながらチョコバナナを味わっていた。

子どもたちは年長児に交流を楽しんでもらえたことや、自分たちで交流を創り出したことに喜びを感じていた。しかし、「年上として自分たちがやってあげなければならないと思っていたけど、それじゃいけない」

「幼稚園さんだって、きっとやってみたいことがあるはずだ」と、4年生だけで交流を考えていくのではなく、年長児と一緒に交流を創り出していくことの大切さを考えることができた。また、「係やリーダーだけが活動している」という反省も出されたように、人任せにするのではなく、自分はどうするのか考えながら主体的に行動することの重要性も考えることができた。

このような反省をふまえ、子どもたちは次回の交流では次のことを考えて計画したり準備をしたりすることを決めた。

- 計画段階から幼稚園さんの思いを聞いたり、幼稚園さんと話し合ったりして交流を進めていく。
- 幼稚園さんが活躍できるようにして、共に楽しめる交流にしていく。
- 人任せにせず、自分のこととして考えて積極的に行動していく。



### ④『幼稚園さんと私たちの夢をかなえる「夢のテーマ

パーク」をコーディネートしよう』(12月)

子どもたちはこれまでの交流をふり返り、自分たちと年長児では交流の楽しみ方に違いがあり、「やってあげる交流」ではなく年長児が「やってみたい交流」に変えていくことが大切であると考えようになった。また、年長児が注意を聞いてくれないときに「自分がじっと我慢する」のではなく、根気強く「言うことを聞いてくれないとつらいよ」と、自分の思いを年長児に伝えていくことの大切さも感じ取ってきた。

第4回目の交流についての話し合いを通じて、子どもたちは、「幼稚園さんがやりたい活動にしよう」「幼稚園さんが活躍できるような活動にしよう」という考えを大切にしながら、「幼稚園さんだけではなく、私たちも楽しめる活動にしよう」と、共に楽しめる交流を創り上げるようにしていこうと考えた。交流会名も、「幼稚園さんとわたしたちの夢をかなえる『夢のテーマパーク』』とした。

今回の交流内容は、的当てやボーリングなどのゲーム(子どもたちは「アトラクション」と呼んでいる)を自分たちで作り楽しむ活動である。これは、4年生の子どもたちが年長児だった時の交流経験がもとになっており、「自分たちと同じように楽しい思い出を作ってもらいたい」という思いで計画された。

アトラクション製作などは、係やグループリーダーを中心に一人ひとりが役割を分担しながら各グループで準備を行った。子どもたちは、「どんなものを作りたい?」と年長児の思いを大切に「そこはテープで貼った方がいいよ」と助言したり「上手にできたね」「すごいねえ」とほめたりしながら年長児の作業をサポートしながら活動していた。また、会場で流すBGMや会場の飾り付けなど会全体についても「今回の交流のねらいは『幼稚園さんの夢をかなえる』だから、私たちが決めてではなく、幼稚園さんの思いを聞いて相談しながら決めよう」と、お互いの思いを調和させながら活動を進めていた。子どもたちは、年長児と一緒に作業以外にも、「幼稚園さんの夢をかなえたい」という強い思いのもと各自が休み時間も惜しんで準備を行った。

「夢のテーマパーク」は会場である体育館で、4年生が並んで通路をつくり、年長児を迎えることから始まった。各グループは活動の時間を考えながら、自分たちのアトラクションの仕事をするペア、他のアトラクションを楽しむペアに別れて楽しく活動をした。年長児も景品渡しやチケット切りなど、自分の仕事を4年生と共に進んでいた。4年生も年長児も、自分のペア以外の人とも楽しく活動をしていた。

今回の交流を通して、4年生の子どもたちは年長児

との信頼関係をより深めることができた。子どもたちは「自分の思いをはっきり言えるようになった」「自分から進んで行動できるようになった」など、自分の成長を感じていた。さらに、「相手のことを考えて行動できるようになった」「友達のことを思いやることができるようになった」など学級の成長や、「幼稚園さんが自分の思いをしっかりとと言えるようになった」「自分から進んで活動できるようになった」など、交流により自分たちも年長児も共に成長してきていることを感じ取っていた。子どもたちは幼小交流の意義を再認識すると共に、「これからもこの交流を続けていきたい」「幼稚園さんも4年生になったときに、わたしたちと同じように、交流を創り出していってもらいたい」と考えるようになっていた。



#### 4. 交流の進行に伴う子どもの意識の変容

ここでは、幼稚園児との出会い前から4回目の交流後までの子どもの意識の流れを、子どもたちへのアンケート調査の結果と4年生の担任教諭への聞き取りなどから明らかにする。

子どもたちへのアンケート調査の項目は、まだペアが出会っていない5月の段階においてはア～ウとカ～クの6項目を実施し、交流2～4回後においては次のア～オの5項目を実施した。

- ア、その交流をどのくらい楽しみにしていたか
- イ、アで「とても楽しみにしていた」を選んだわけ
- ウ、アで「まあまあ楽しみにしていた」「あまり楽しみにしていなかった」を選んだわけ
- エ、交流をして嬉しかったこと
- オ、交流をして困ったり悩んだりしたこと
- カ、交流することに不安はあるか
- キ、カで「とても不安」「少し不安」を選んだわけ
- ク、カで、「不安はあまりない」「ない」を選んだわけ

① 出会い前の意識

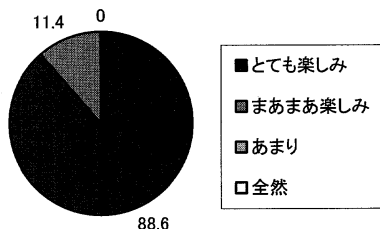


図3 「交流を楽しみにしていましたか」

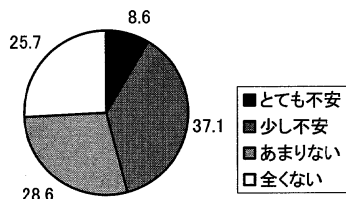


図4 「交流で不安に思っていることはありますか」

表1 交流を楽しみにしている理由

一緒に遊ぶ

- ・幼稚園さんと一緒に遊べるから
- ・幼稚園さんと仲良くなりたいから
- ・おもしろいこととか話してくれるかもしれないから

かわいい・小さい

- ・幼稚園さんはとてもかわいいから
- ・幼稚園さんの喜ぶ顔が見たいから
- ・小さい子が好きだから
- ・いつも遊んでいる2歳の弟がとても可愛くて楽しいから
- ・小さい子をお世話することが楽しみだから

力を付ける

- ・小さい子の面倒をみる力がほしかったから
- ・自分にいろいろな力をつけたいから

きょうだいがいない

- ・自分にはきょうだいがいないから
- ・いつも遊んでいるきょうだい以外の人と遊んでみたいから

交流への関心

- ・ペアさんがどんな人か知りたいから
- ・ペアさんの顔を早く見たいから
- ・小さい子との交流が初めてだから
- ・毎年4年生は幼稚園さんと交流しているから

幼稚園さんのために

- ・幼稚園さんも思い出ができるから

図3から、ほとんどの子どもが「(交流を)とても楽しみにしていた」と答えており、交流活動を子どもたちが心待ちにしていたことが分かる。表1から、「小さい・かわいい」幼稚園児と「一緒に遊ぶ」ことを楽しみにし、交流活動をして「自分に力をつけたい」という思いも持っていたことが分かる。一方、図4のように、半数近くの子どもの不安感も感じており、出会いを楽しみにしている反面、不安感も抱いていた。

表2 不安に思っていること

相手の行動に対する不安

- ・勝手な行動を取りそう
- ・幼稚園さんがどういうことをするか分からない
- ・あばれたりするかもしれない
- ・わがまを言ったりするかもしれない
- ・もらしたり泣いたりするかもしれない
- ・おとなしいか

自分の行動・能力に対する不安

- ・喜んでくれるか
- ・ちゃんと面倒をみられるか
- ・責任を持って世話ができるか
- ・思い通りにいくか
- ・リーダーらしくできるか

関係に対する不安

- ・仲良くしてくれるか
- ・幼稚園さんが慣れてくれるか

表3 「不安感はない」の理由

小さい子に慣れている・経験がある

- ・小さい子と遊び慣れている
- ・弟がいるのでわがままなことは分かっている
- ・いとこなどと遊んでいたから大丈夫
- ・1年生さんと遊んで慣れた
- ・自分にその子の気持ちが分かる

かわいさ・楽しみ

- ・かわいい
- ・甘えてくれる
- ・楽しみの方が大きい

不安感は表2のように「相手の行動に対する不安」や「自分の行動・能力に対する不安」「関係に対する不安」等があった。一方、表3のように「小さい子どもに慣れている・小さい子どもと遊んだ経験がある」子どもは不安感が少ないことが分かる。

②運動会（6月）

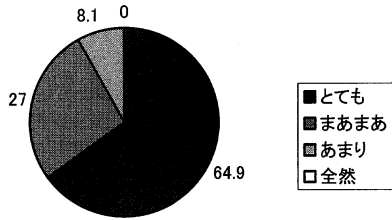


図5 「運動会での交流を楽しみにしていましたか」

表4 『とても楽しみにしていた』を選んだわけ

ペアと一緒に楽しみ・もっと仲良く

- ・幼稚園さんといるととても楽しくなるから
- ・またペアの子に会えるから
- ・にこにこしてくれるから
- ・幼稚園さんともっと仲良くなれると思ったから
- ・可愛くて言うことをよく聞いてくれたから
- ・ペアの子と何かやるのは楽しいから

一緒に踊るのが楽しみ

- ・練習の時、教えてあげたことをやってくれると思っていたから
- ・ペアの子がちゃんと踊ってくれるから
- ・本番でちゃんと踊ってくれるか楽しみだった
- ・練習の時から踊りが上手だったから
- ・真剣になるときは真剣になってくれるから

踊りたい

- ・早く踊りたかったから
- ・今までがんばって練習してきたから

表5 『まあまあ楽しみにしていた』『あまり楽しんでいた』『全然楽しんでいた』を選んだわけ

言うことを聞いてくれない

- ・言うことを聞いてくれないかもしれないから

その他

- ・暑かったから

図5に示す通り60%以上の子どもたちが「とても楽しみにしていた」と答えている。ペアと一緒に活動することそのものが楽しいという反応が多いが、ペアの子が自分が教えたことに一生懸命応えてくれることへの期待感もある。ペアとの間に応答関係が芽生えてきているようである。一方で表5に示すように、「まあまあ」や「あまり」を選んだ子どもたちは「言うことを聞いてくれないかもしれない」という不安感を持っていた。運動会という大きな場でペアを統制できるかという不安が子どもたちを悩ませ始めているようだ。これは運動会後に尋ねた「ペアとの交流で困ったり

悩んだりしたことは？」というアンケート結果（図7）とも重なる。困ったり悩んだりしたことがあると回答した内の半数以上の子どもが「言うことを聞かない」を選んでおり、「考えが分からない」「気持ちを話さない」なども4割前後となっている。まだ交流は始まったばかりだが、実際にペア活動をしてみて「かわいい」だけではない幼稚園児の反応に戸惑っている様子が見られる。

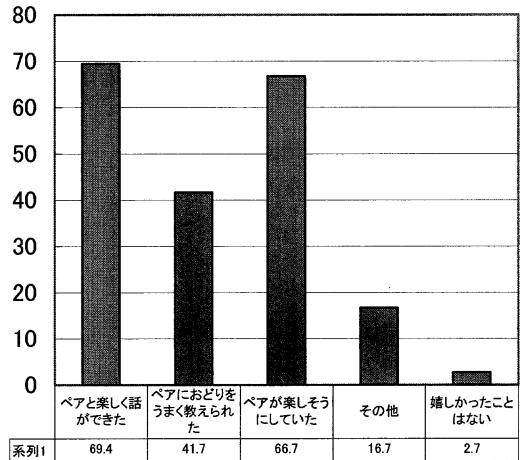


図6 交流で嬉しかったこと(複数回答)

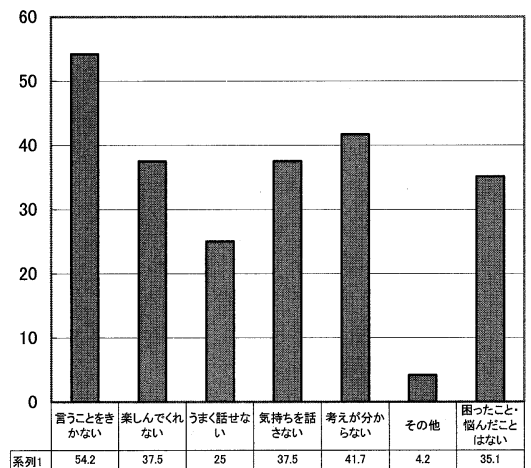


図7 交流で困ったり悩んだりしたこと(複数回答)

かがわれる。しかし、嬉しかったこともあったようで、図6のように踊りを教えながらペアと楽しく話できたことやペアが楽しそうにしていたことに子どもたちは喜びを感じているようだ。

③チョコバナナづくり (10月)

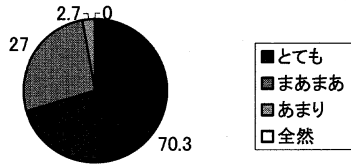


図8 「チョコバナナづくりでの交流を楽しみにしていましたか」

表6 『とても楽しみにしていた』を選んだわけ

理由
<b>ペアと会いたい・一緒に活動したい</b>
・ペアの子と会えるから
・ペアの子が可愛くて好きだから
・ペアの子がチョコバナナを食べてどんな感想を言うか楽しみだから
・ペアの子が楽しそうだったから
・久しぶりに長い時間の活動ができるから
・初めて一緒に作るから
・ペアの子が笑顔だから
・ペアの子ともっと仲良くなりたいから
・ペアの子に楽しんでほしいから
<b>その他</b>
・チョコバナナが好きだから
・今までがんばって準備したから
・総合係の仕事がたくさんあったから

表7 『まあまあ楽しみにしていた』『あまり楽しみにしていなかった』を選んだわけ

理由
<b>ペアの子の表情への不安</b>
・ペアの子があまり嬉しそうではなかったから
・いつも楽しんでないような感じだから
・楽しんでもらえるか心配だったから
<b>相手の行動に対する不安</b>
・ペアの子が暴れたりしたらいけないと思った
・ペアの子が言うことを聞かないことが多いから
・騒がないかなと思ってたから
<b>自分の行動・能力に対する不安</b>
・総合係でいろんな仕事を持っているから
・ちゃんとリードできるか心配だったから
・失敗したらどうしようと思ったから

図8に示す通り、70%以上の子どもが「とても楽しみにしていた」と答えており、それを選んだ理由には「ペアの子が可愛くて好きだから」「ペアの子が笑顔だから」など、愛着の気持ちの高まりを表したものが見られる。また、表7には、「ペアの子の表情への不安」

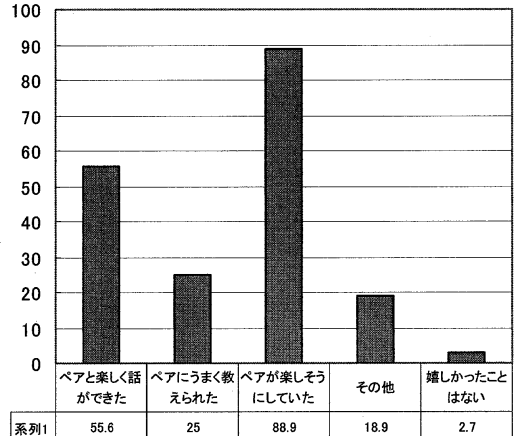


図9 交流で嬉しかったこと(複数回答)

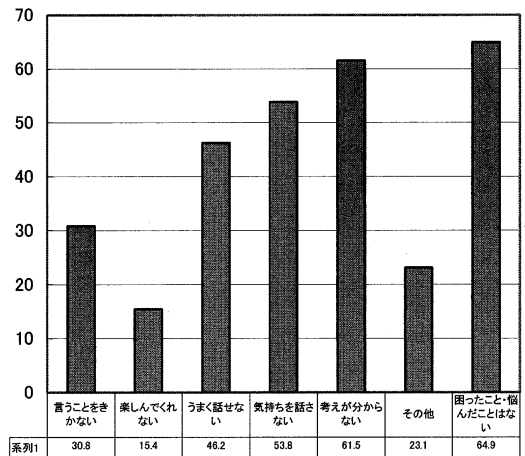


図10 交流で困ったり悩んだりしたこと(複数回答)

を持つ子どもがみられ、出会い前に抱いていた「相手の行動に対する不安(勝手な行動をとりそう、わがままを言ったりするかもしれない)」や、「自分の行動・能力に対する不安(ちゃんと面倒をみられるか、責任を持って世話ができるか)」などとは質の異なる不安感が出てきている。実際に交流をしてみると図9・10に示す通り「ペアが楽しそうにしていた」ことに多くの子どもが喜びを感じ「困ったり悩んだりしたことはない」と回答した子どもは65%近くにもなった。前回まで多かった「言うことを聞かない」ことに悩む子どもも減少し、ペアと滑らかにかかわる力が身についてきているようだ。一方で「ペアの子どもが考えていることが分からない」「気持ちを話さない」「うまく話せない」と悩む子どもはまだ多い。

④テーマパーク（12月）

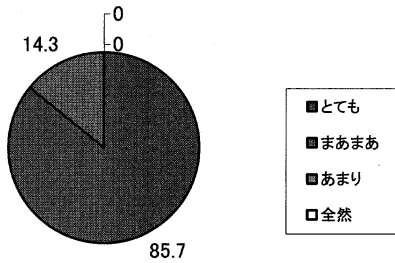


図11 テーマパークの交流を楽しみにしていましたか

表8 『とても楽しみにしていた』を選んだわけ

<b>ペアの子を楽しませたい</b>
・幼稚園さんを喜ばせたかったから
・幼稚園さんが喜ぶだろうと思ったから
・幼稚園さんが楽しみにしているから
・幼稚園さんが一生懸命しているから
<b>ペアの子と楽しみたい</b>
・幼稚園さんと一緒にまわれるから
・幼稚園さんも私たちも楽しかったから
・また幼稚園さんと楽しく交流できるから
・幼稚園さんと一緒に話したかったから
・幼稚園さんの笑顔を早く見たかったから
<b>一緒に準備をがんばってきた</b>
・一緒に作ったアトラクションだから
・みんなで作ったアトラクションだから
・みんなこの日のために努力してきたから
・一生懸命準備をしたから
・成功するかどうか楽しみだったから
<b>ペアとの交流が楽しい</b>
・小さい子の面倒をみるのがちょっと楽しくなってきたから
・幼稚園さんに注意をしたらすぐに直してくれて安心したから
・幼稚園さんとの交流は4年生しかできないことだから
<b>アトラクション・景品が楽しい</b>
・みんなのアトラクションがおもしろそうだから
・景品でどんなのがもらえるかわくわくしたから
・作っているときからわくわくしていたから
・私たちが年長のときと同じことをするから

表9 『まあまあ楽しみにしていた』を選んだわけ

・幼稚園さんが喜んでくれるか少し不安
・言うことを聞いてくれなかったら、と少し不安

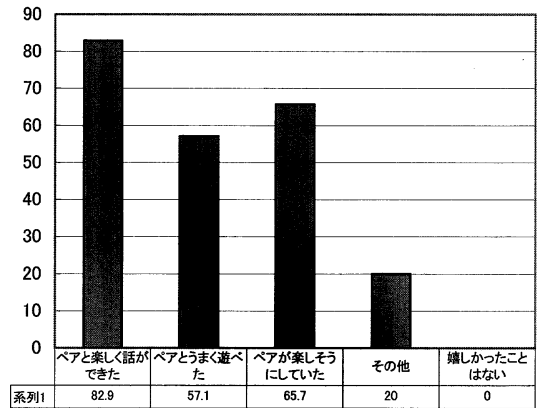


図12 交流で嬉しかったこと(複数回答)

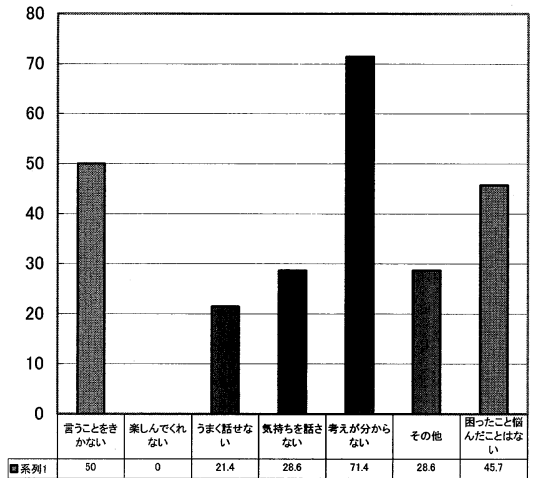


図13 交流で困ったり悩んだりしたこと

この活動においては、子どもたちの意識に更なる変化が見られる。まず、図11の通り85%以上の子どもが交流を楽しみにしており、その理由として「ペアの子を喜ばせたいから」「ペアの子が楽しみにしているから」など、相手への意識が芽生えている点に注目したい。また、「小さい子の面倒をみるのがちょっと楽しくなり」「安心して」と、かかわることに自信さえのぞかせている。実際の交流においても全員の子どもが「(交流で)嬉しかったことがある」と回答し、80%以上の子どもが「ペアと楽しく話げできた」と答えている。更に図13の通り、初めて全員が「ペアは楽しんでくれた」と感じたことは、この活動が満足のいくものであったことを表している。まだ、「(ペアの)考えが分からない」と感じている子どもも多くいるが、これは、より深くかかわりたいと願う気持ちの表れでもあるのではないかと考えられる。



4回の交流を通して、子どもたちは迷いながらも年下の子どものかかわり方を身につけてきた。当初は「小さくてかわいいから交流したい」と思っていたが、実際に交流してみるとなかなか話をしてくれなかったり言うことを聞かなかったりして困ることがたくさん出てきた。子どもたちは、悩みながらもその都度学級の友達に相談したり学級担任にアドバイスをもらったりしてかかわり方を変え、出会いから半年後にはおよそ満足のいく交流を実現させた。幼い子どもとかかわるには、単に可愛がるだけでなく相手の気持ちを尊重したり、時には論じたりすることも必要であることを身をもって経験したようである。

こうした経験は、子どもの対人関係能力の発達に何らかの影響を与えたであろうか。次項では本交流における対人関係能力の育成に有効な要因を探るために道徳性検査と社会性調査の結果を示す。

## 5. 道徳性検査と社会性調査

### (1) 道徳性検査

対象：第4学年7学級

実施時期：平成17年7月

調査内容：教研式 NEW HUMAN による

結果：調査項目は18項目あり、どれも人間関係力として大切だが、ここでは視点2の礼儀・親切・友情について結果を述べ、考察を行う。結果は、該当の項目の出現率で表す。

#### ○礼儀

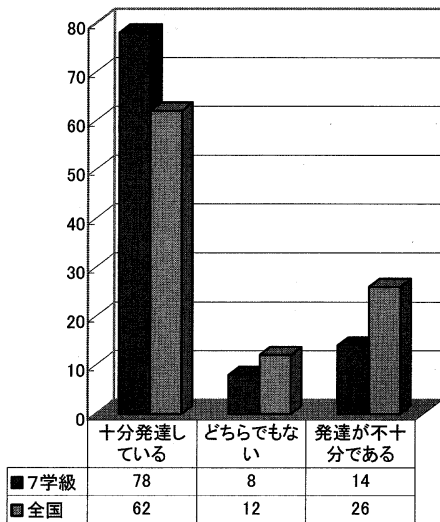


図14 「礼儀」の結果

#### ○親切

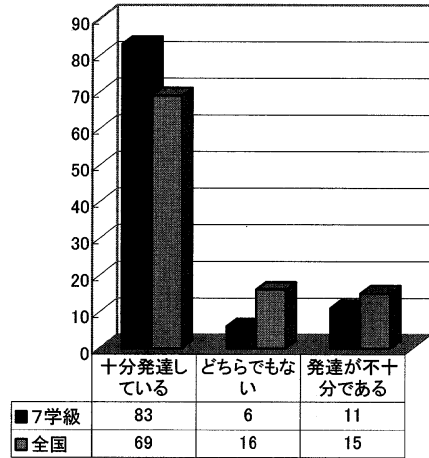


図15 「親切」の結果

#### ○友情

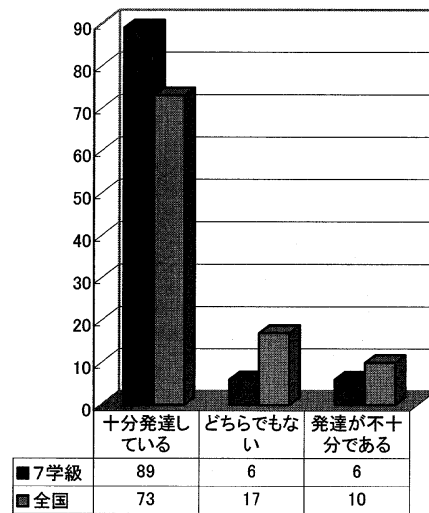


図16 「友情」の結果

図14～16に示す通り、いずれの項目についても「十分発達しており」「全国平均より高い割合で」獲得している。

この結果を3年前に実施した同じ道徳性検査の4年生の結果(図17・18・19)と比べると、今年度の4年生に特長が見られる。平成14年度は礼儀・親切・友情のいずれの項目においても発達の度合いが全国を下回っている。この結果を幼小交流学習との関連で考えてみると、平成14年度においても小学4年生と幼稚園年長児の幼小交流学習を行っていたが、学校事情などにより今年度のように時間数を確保できておらず、

交流の回数が少ないことと、子どもたちが1回の交流毎に悩みを出し合い幼稚園児とのかかわり方について考え合うだけの時間的な余裕がなかった。

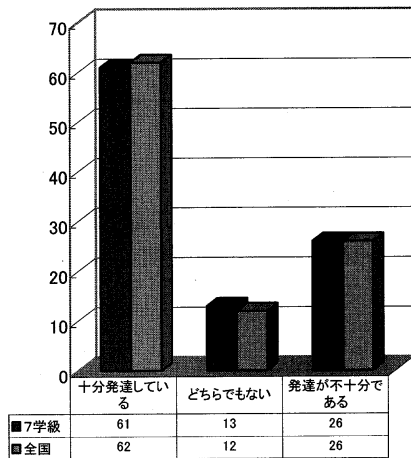


図17 平成14年度の「礼儀」の結果

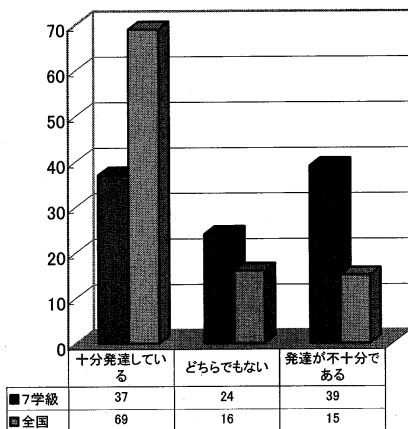


図18 平成14年度の「親切」の結果

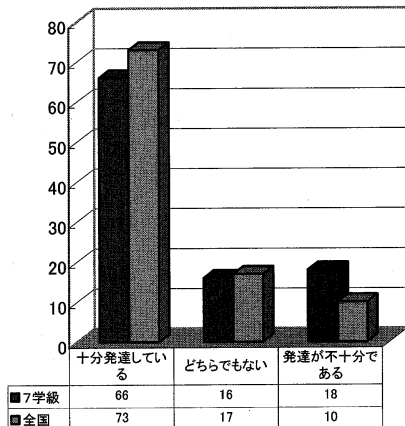


図19 平成14年度の「友情」の結果

幼小交流の回数と交流前後の同学年によるかかわり方についての話し合い活動がどの程度子どもの道徳性の発達に影響を及ぼすのかは、この結果からだけでは不明であるが、今年度の実践にはそれらがあったことを考えると重要な要因であることが考えられる。

## (2) 社会性調査

対象：小中学校全学年

実施時期：平成17年9月

調査内容：広島大学附属三原学園かかわり学習部会が作成した社会性調査

結果：調査項目は16項目あるが、ここでは「対人的行動に対する態度」のうち『思いやり・親切・同情』の結果を述べ、考察を行う。

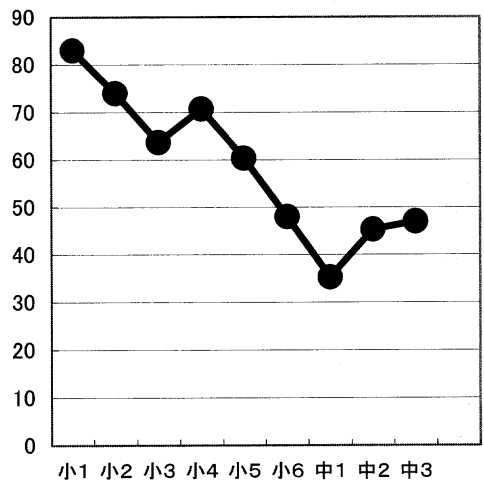


図20 「思いやり・親切・同情」の結果

図20から分かるように、全体としては小1から中1にかけて下降傾向にあるが、小4の年だけは上昇している。これは小4に固有の対人関係に関する経験が背景にあるのではないかと考えられ、幼稚園児との交流活動が該当する。

## 6. 考察

研究の結果、4年生の子どもがペアの子どもとの交流のために試行錯誤をしながらも活動を生み出し、かかわることを繰り返すことが人間関係能力の育成に有効と分かった。ペアとかかわる活動を計画的に継続すること、交流の前後に同学年の子ども同士でかかわり方についての話し合いの時間を持つことがペア活動の初年度における対人関係能力の育成に有効な要因と考えられる。